

雌阿寒岳の火山活動解説資料（令和8年9月）

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

3月16日以降、噴火は観測されていません。

ポンマチネシリ火口付近では、2025年9月12日の火山性微動の発生以降、同火口方向上がりの傾斜変動が継続しましたが、5月以降は火口方向下がりの変動に転じ、6月以降は火山性地震も概ね少なく経過しています。ただし、8月以降は時折わずかな傾斜変動や地震のやや増加が認められます。2025年9月以降、活発に推移していたポンマチネシリ96-1火口の噴煙活動は、5月頃以降、低下が認められていますが、引き続きやや活発な状態が続いています。

火山活動の活発な状態が続いており、ポンマチネシリ火口から約500mの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。

ポンマチネシリ火口から約500mの範囲では、噴火に伴い弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。地元自治体などの指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

風下側では火山灰や小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

令和7年9月15日に火口周辺警報（噴火警戒レベル2：火口周辺規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○活動概況

- ・噴気など表面現象の状況（図1、図2-①、図3～7、図9-①②⑤、図10-①③、図12-①～⑥）

3月16日以降、噴火は観測されていません。

1日に実施した現地調査を実施しました。2025年9月15日の観測では、2025年9月10日の観測時と比べて96-1火口内に新たに噴気孔が形成され、複数の噴気孔から活発な噴気活動が認められていました。1日には、この新たな噴気は認められなくなっており、96-1火口の噴気（噴煙）活動に衰退が認められました。一方で、火口内の西壁からは活発な噴気活動が継続していました。その他各火口の噴気活動の状態や地表面温度分布には、これまでの観測と比べて特段の変化は認められませんでした。

ポンマチネシリ96-1火口では、2025年9月12日以降、噴煙の量が増加し、その後も活発に推移しましたが、5月頃からやや減少して推移しています。今期間、噴煙の高さは火口縁上300m以下で経過しました。

その他の各火口の噴気の高さ（いずれも火口縁上の高さ）は、赤沼火口及び北西斜面06噴気孔列では100m以下、中マチネシリ火口では300m以下で経過し、噴気活動は低調な状態です。

- ・地震及び微動の発生状況（図2-④⑤、図8、図9-④⑦、図12-⑦⑧）

ポンマチネシリ火口付近の火山性地震は、6月以降、概ね少なく経過していますが、8月以降、時折やや増加が認められており、今期間中も中～下旬にやや増加がみられました。震源はポンマチネシリ火口付近のごく浅い所～深さ0km付近、中マチネシリ火口付近の深さ1km付近に分布しました。

火山性微動は観測されていません。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道、地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所及び機動的な調査観測・解析グループ（北海道大学・東京大学・国立研究開発法人防災科学技術研究所）のデータを利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図10mメッシュ（火山標高）』、『数値地図50mメッシュ（標高）』、『電子地形図（タイル）』及び『基盤地図情報』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和8年10月分）は令和8年11月10日に発表する予定です。

雌阿寒岳

・ポンマチネシリ96-1火口周辺の全磁力の状況（図10-②④）

全磁力連続観測では、ポンマチネシリ96-1火口の噴煙が増加した2025年9月12日以降、96-1火口付近の地下の熱活動の高まりを示唆する全磁力値の減少がみられていましたが、5月頃から概ね増加傾向が続いています。

・地殻変動の状況（図2-③⑥、図9-③⑥⑧、図11、図13）

ポンマチネシリ火口近傍の阿寒富士北2観測点では、2025年9月12日以降、火口方向が上がる緩やかな変動が続きましたが、5月9日頃から火口方向下がりの変化に転じています。その後も概ね火口方向下がりの変化が続いていますが、8月上旬にはわずかな火口方向上がり、9月中旬以降には東西成分で変化の鈍化とわずかに傾向の変化も認められています。

GNSS連続観測では、主に東側山麓の観測点による基線で2025年8月末頃から山体付近の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められていましたが、4月末頃から鈍化し、以降は特段の変化は認められていません。

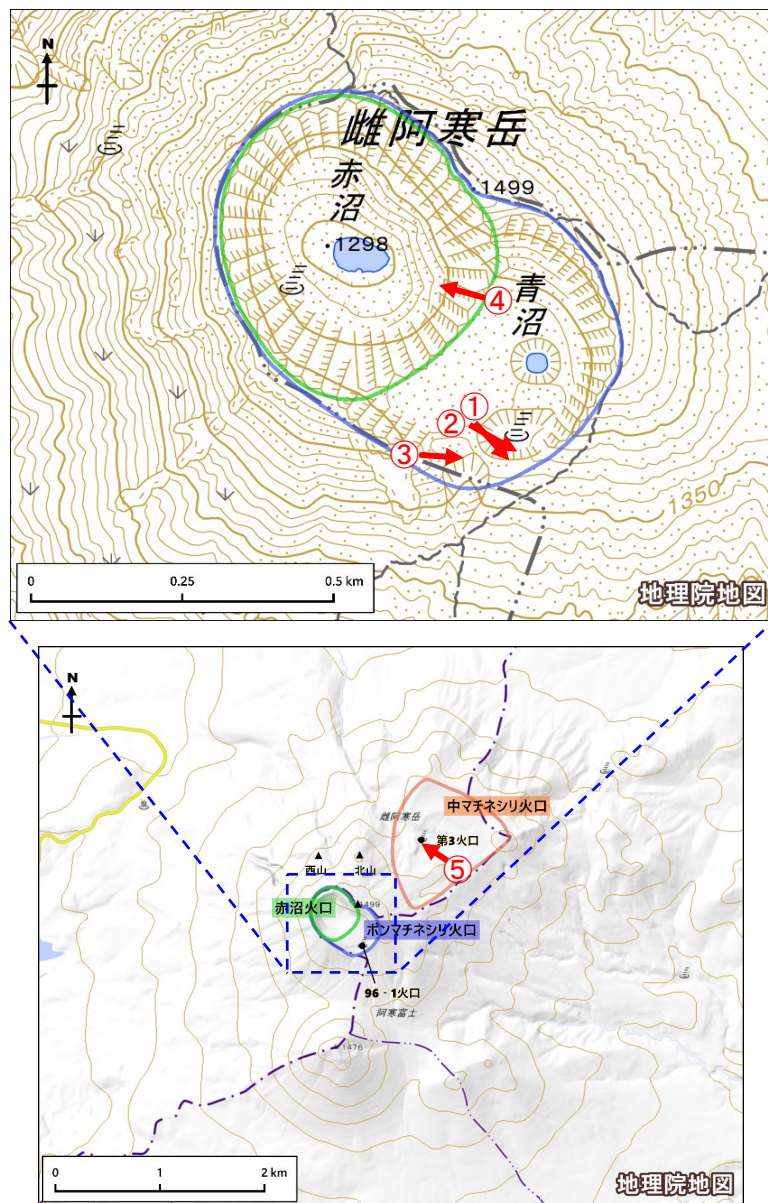


図1 雌阿寒岳 火口及び噴気孔の位置図、写真及び赤外熱映像の撮影方向（矢印）
各火口の火口縁は、概ねの範囲を示すものです。

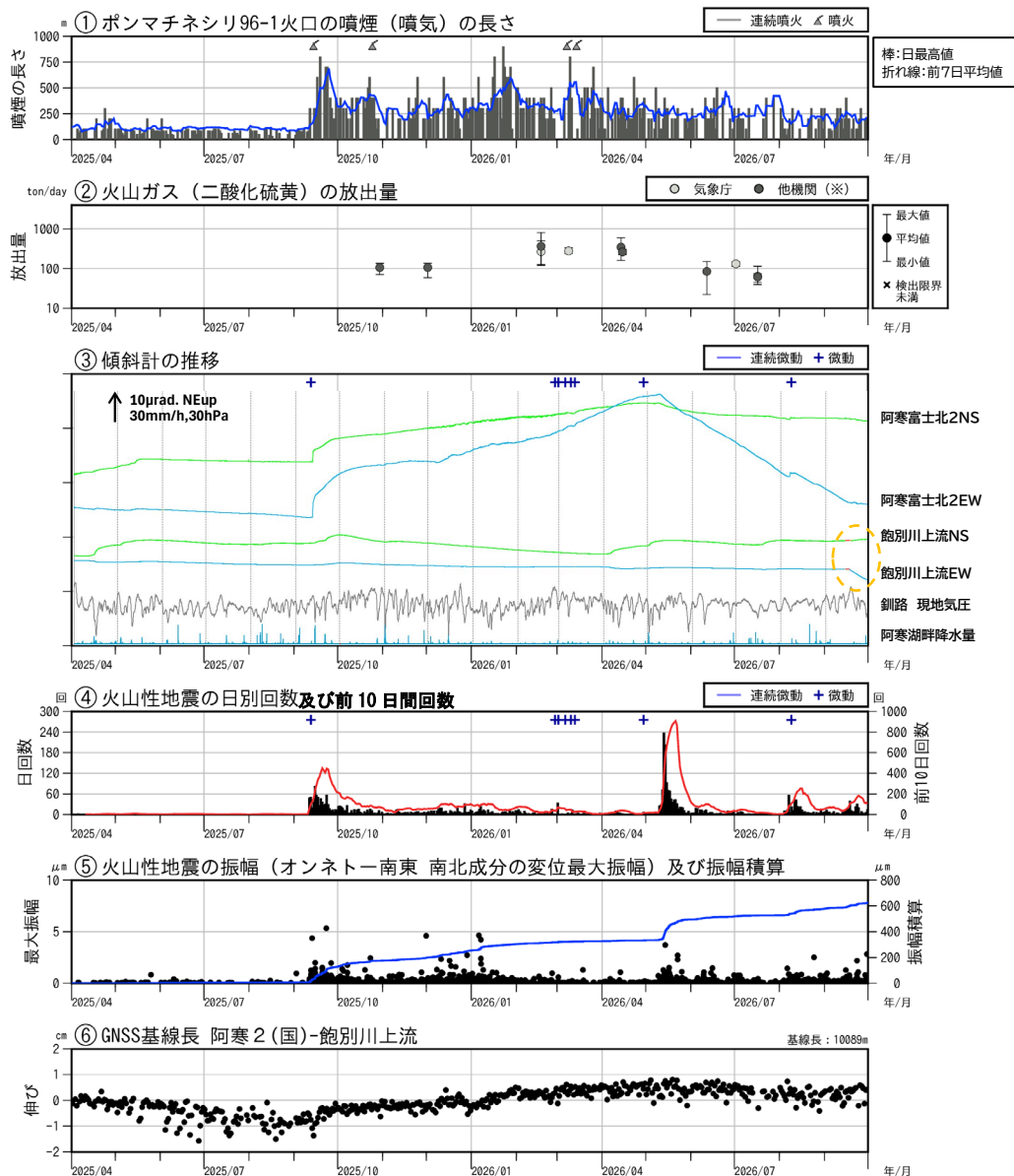


図2 雌阿寒岳 短期の火山活動経過図（2025年4月～2026年9月）

- ・①の噴気の長さについては図10の説明図を参照ください。
- ・②の他機関（※）は、北海道大学及び機動的な調査観測・解析グループ（北海道大学・東京大学・防災科学技術研究所）の観測結果を示します。
- ・③の傾斜計データには、降水や融雪、気圧変動の影響と考えられる変動が含まれています。また、飽別川上流の直近の変化（黄破線内）は、傾斜計の機器交換を行った影響です。
- ・2025年9月の噴火は、9月12日から15日の間に発生したと考えられます。
- ・期間内に発生した火山性地震はポンマチネシリ火口付近の浅部で発生したものが多数を占めます（図8参照）。
- ・グラフ⑥は、GNSS連続観測の基線図（図13）基線⑨に対応しています。
- ・2025年9月以降、ポンマチネシリ96-1火口の噴煙活動は活発に推移しましたが、5月頃から噴煙量がやや減少した状態で推移し、それ以前にみられた噴煙の長さが時々増大する様子は認められなくなっています。
- ・2025年9月12日の火山性微動以降、阿寒富士北2観測点でポンマチネシリ火口方向が上がる傾斜変動が継続しましたが、5月上旬以降は概ね火口方向下がり継続しています。ただし、8月上旬にはわずかな火口方向上がり、9月中旬以降には東西成分で変化の鈍化とわずかに傾向の変化も認められています。
- ・火山性地震は、6月以降概ね少なく経過していますが、8月以降は時折やや増加がみられています。
- ・東側山麓の観測点によるGNSS基線では、2025年8月末以降、伸びが認められましたが、4月末頃から鈍化し、以降、特段の変化は認められていません。

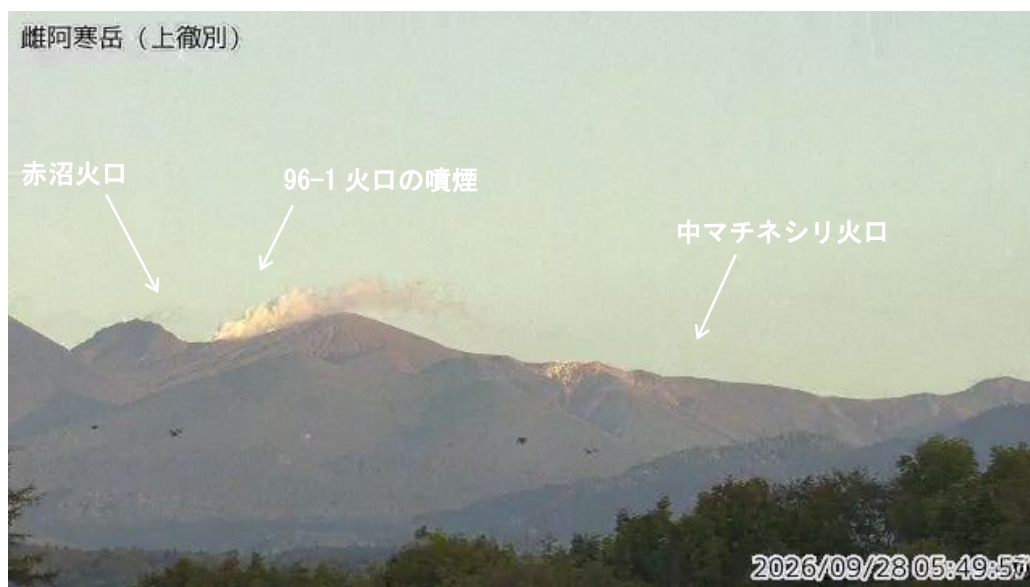


図3 雌阿寒岳 各火口、噴気孔の噴気（噴煙）の状況

かみてしべつ

上：上徹別監視カメラによる（雌阿寒岳の南東側から）

下：オンネトー展望台（道）監視カメラによる（雌阿寒岳の西側から）

- ・ 96-1火口の噴煙は、5月頃から量の減少、高さや長さの低下が認められるものの、引き続きやや活発な状態が続いています。
- ・ その他の火口及び噴気孔の噴気活動は低調に推移しています。

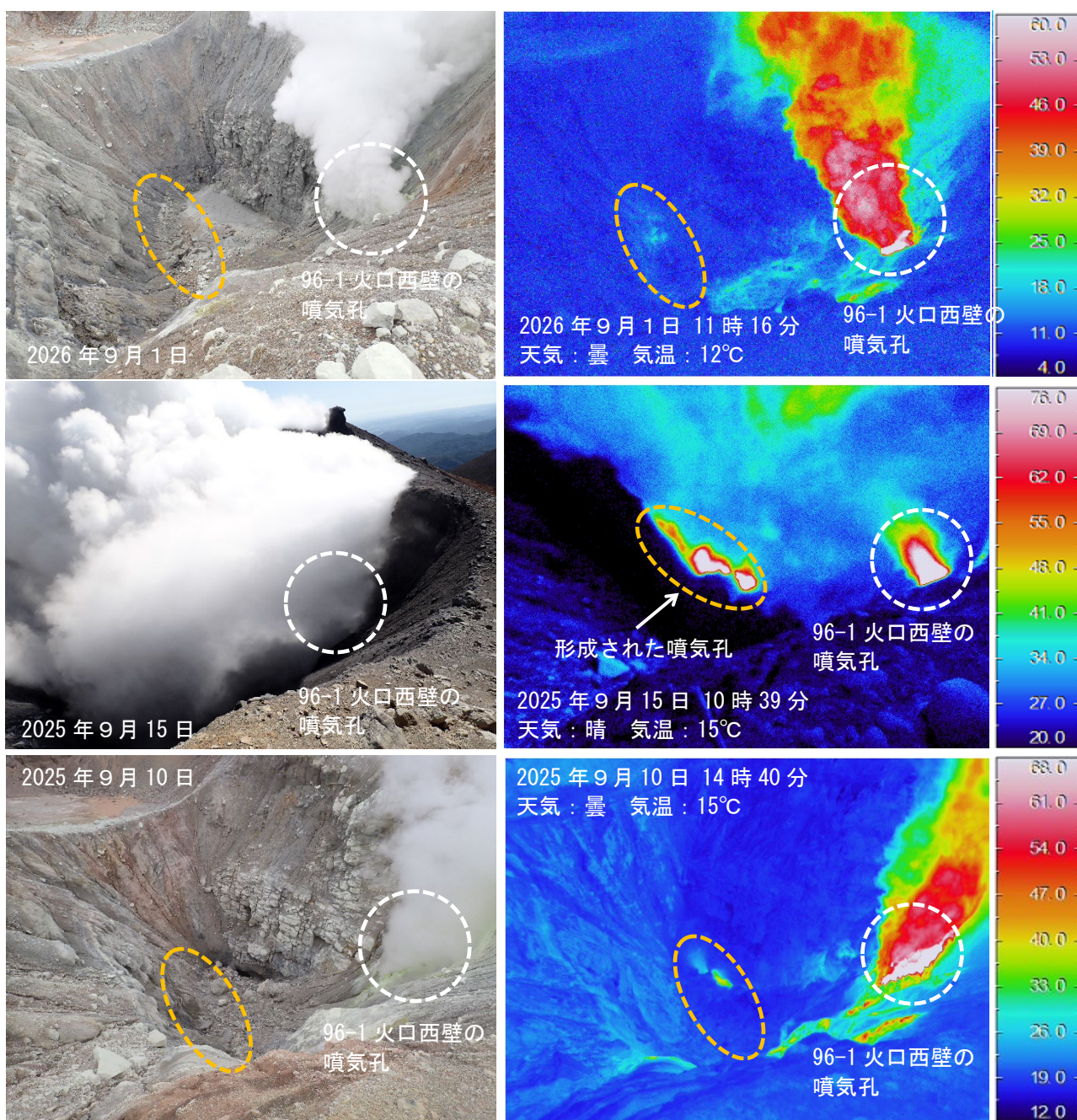


図4 雌阿寒岳 赤外熱映像装置によるポンマチネシリ 96-1 火口の地表面温度分布

上：図1の①から撮影、中：図1の②から撮影、下：図1の①から撮影

- ・ 2025 年 9 月 15 日の観測では、2025 年 9 月 10 日の観測時と比べて 96-1 火口内に新たに噴気孔（黄破線）が形成され、複数の噴気孔から活発な噴気活動が認められていました。1 日に実施した現地調査では、この活発な噴気は認められなくなっており、96-1 火口の噴気（噴煙）活動に衰退が認められました。
- ・ 一方、火口内の西壁からは活発な噴気活動（白破線）が継続していました。

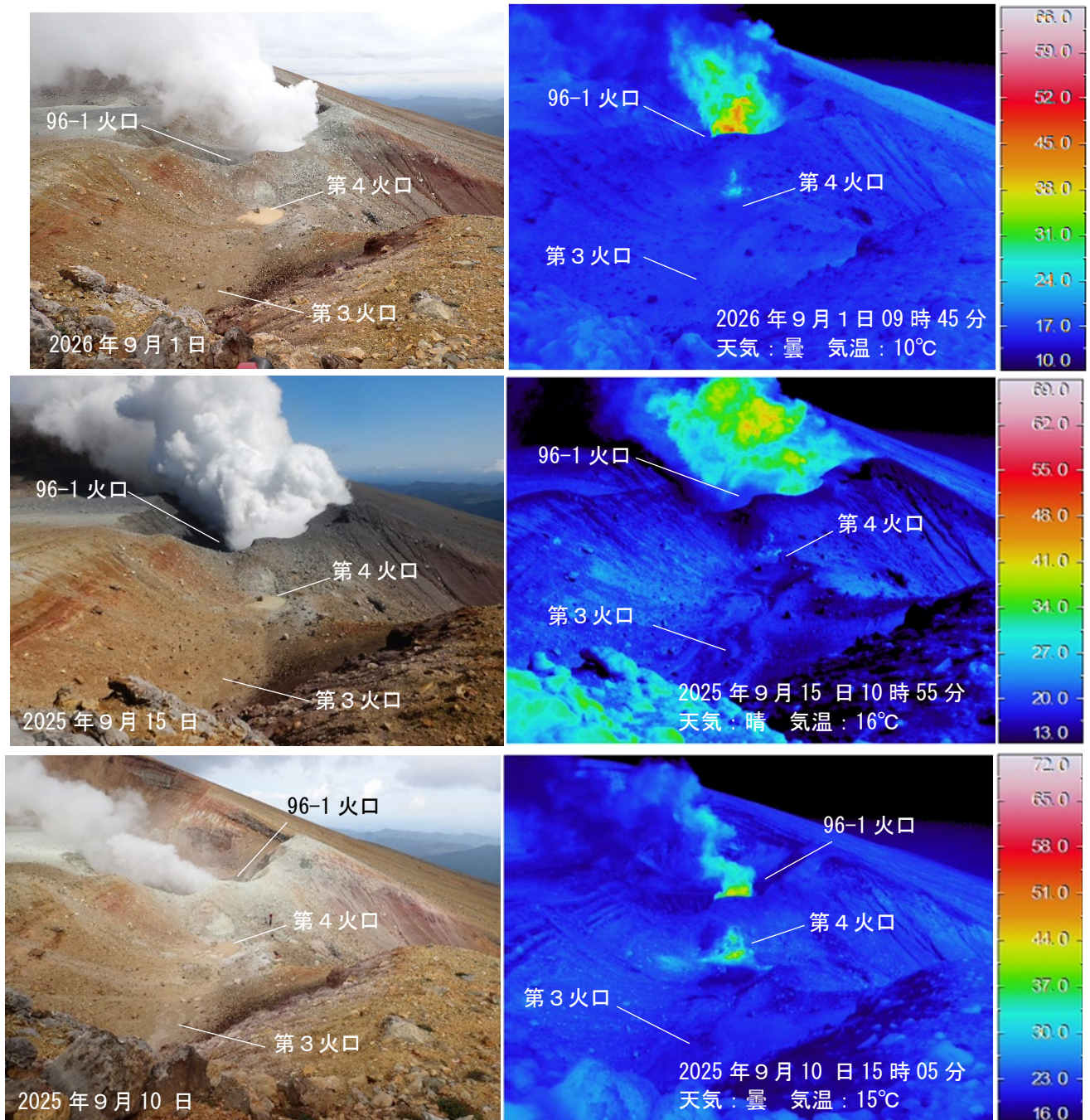


図5 雌阿寒岳 赤外熱映像装置によるポンマチネシリ第3火口及び第4火口の地表面温度分布
西側（図1の③）から撮影

- ・ 1日の観測では、2025年9月15日の観測と比べて、第4火口内東側及び北側の地熱域の状況に特段の変化は認められませんでした。なお、2025年9月15日の観測では、それまでの観測と比べて第4火口内東側及び北側の地熱域の縮小が認められていました。

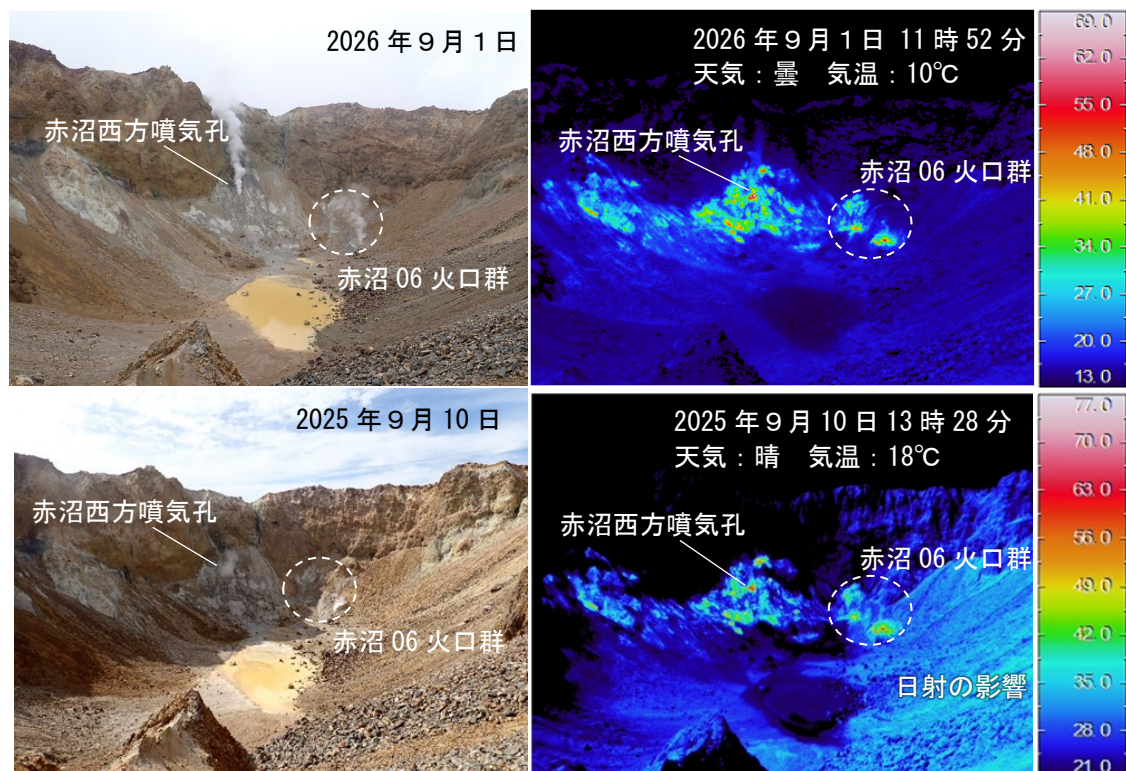


図6 雌阿寒岳 赤沼火口の地表面温度分布

東側（図1の④）から撮影

- ・ 2025年9月10日と比べ、赤沼西方噴気孔で、噴気のわずかな増加、噴気孔の地表面温度のわずかな上昇が認められたものの、特段の変化は認められませんでした。

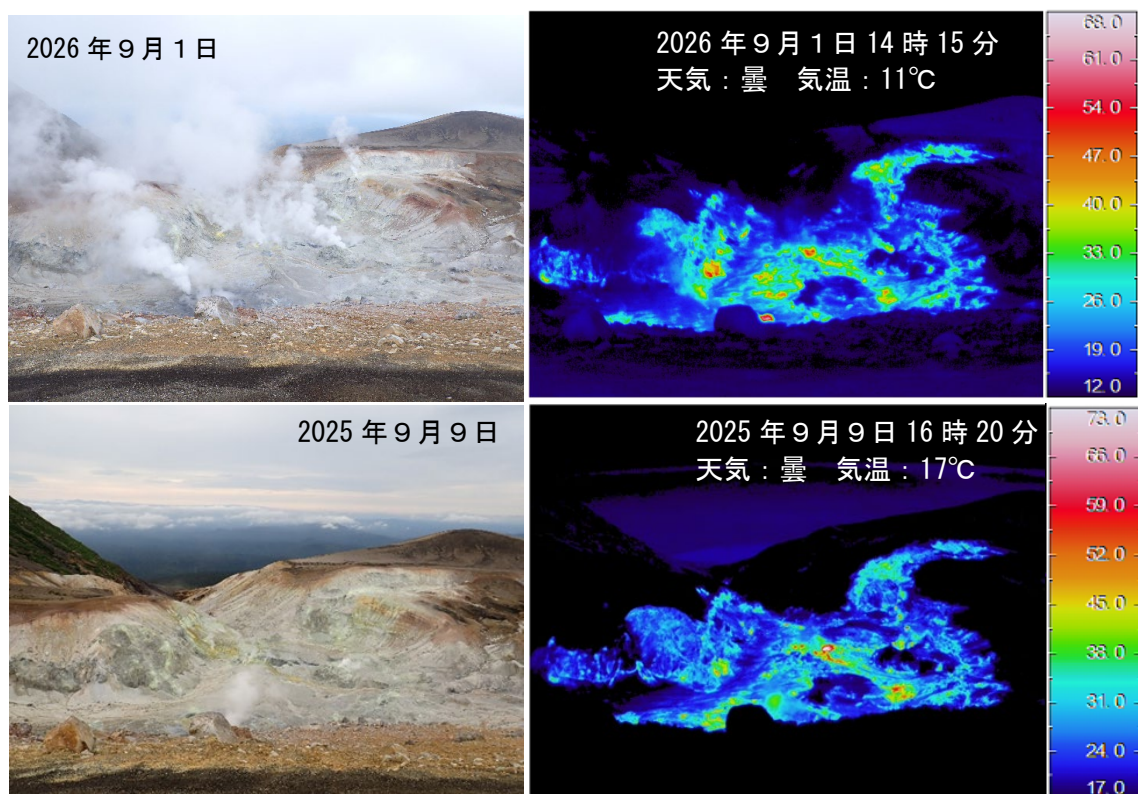


図7 雌阿寒岳 中マチネシリ火口の地表面温度分布

東側（図1の⑤）から撮影

- ・ 火口内の熱泥の湧出や噴気の状況にわずかな変化はあったものの、特段の変化は認められませんでした。

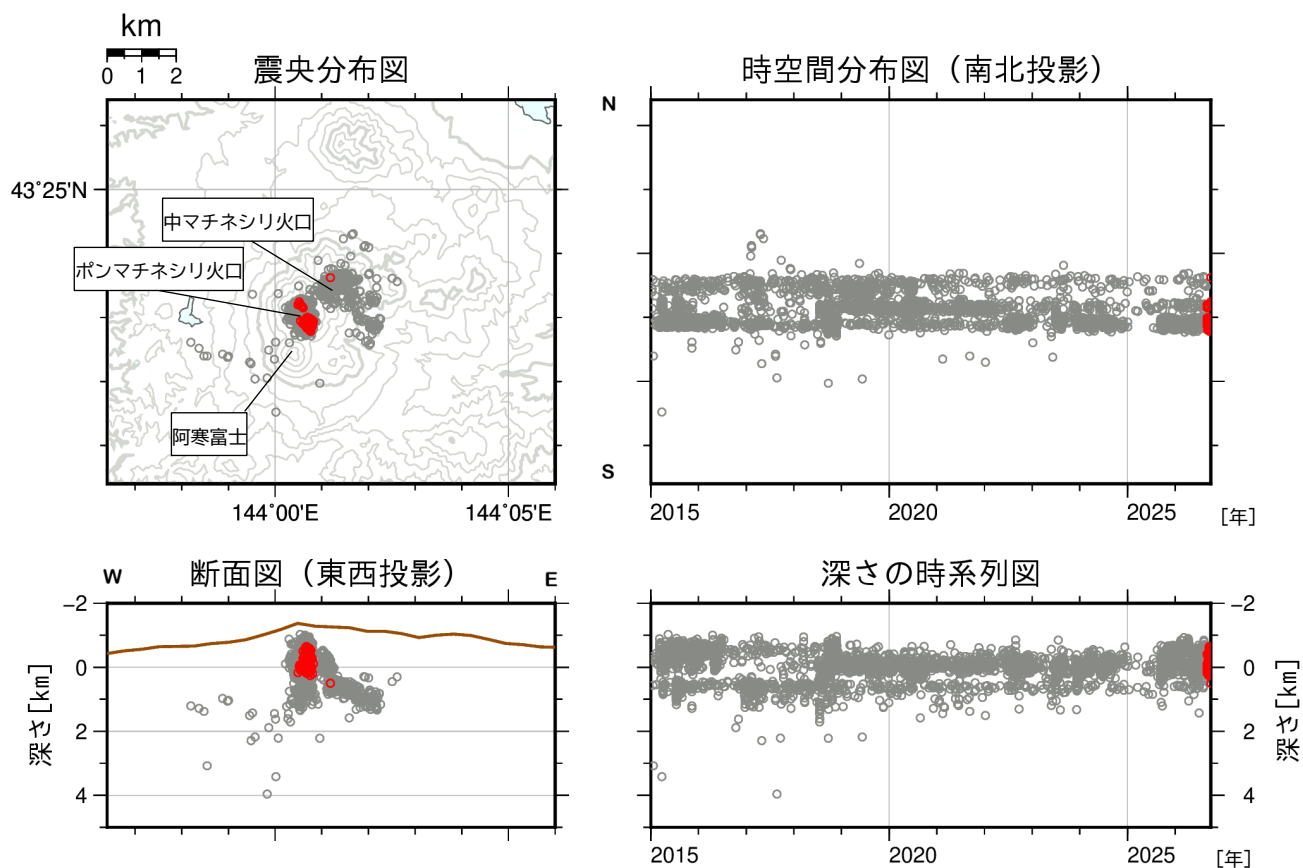


図8 雌阿寒岳 火山性地震の震源分布（2015年1月～2026年9月）
○：2015年1月～2026年8月の震源 ○：2026年9月の震源

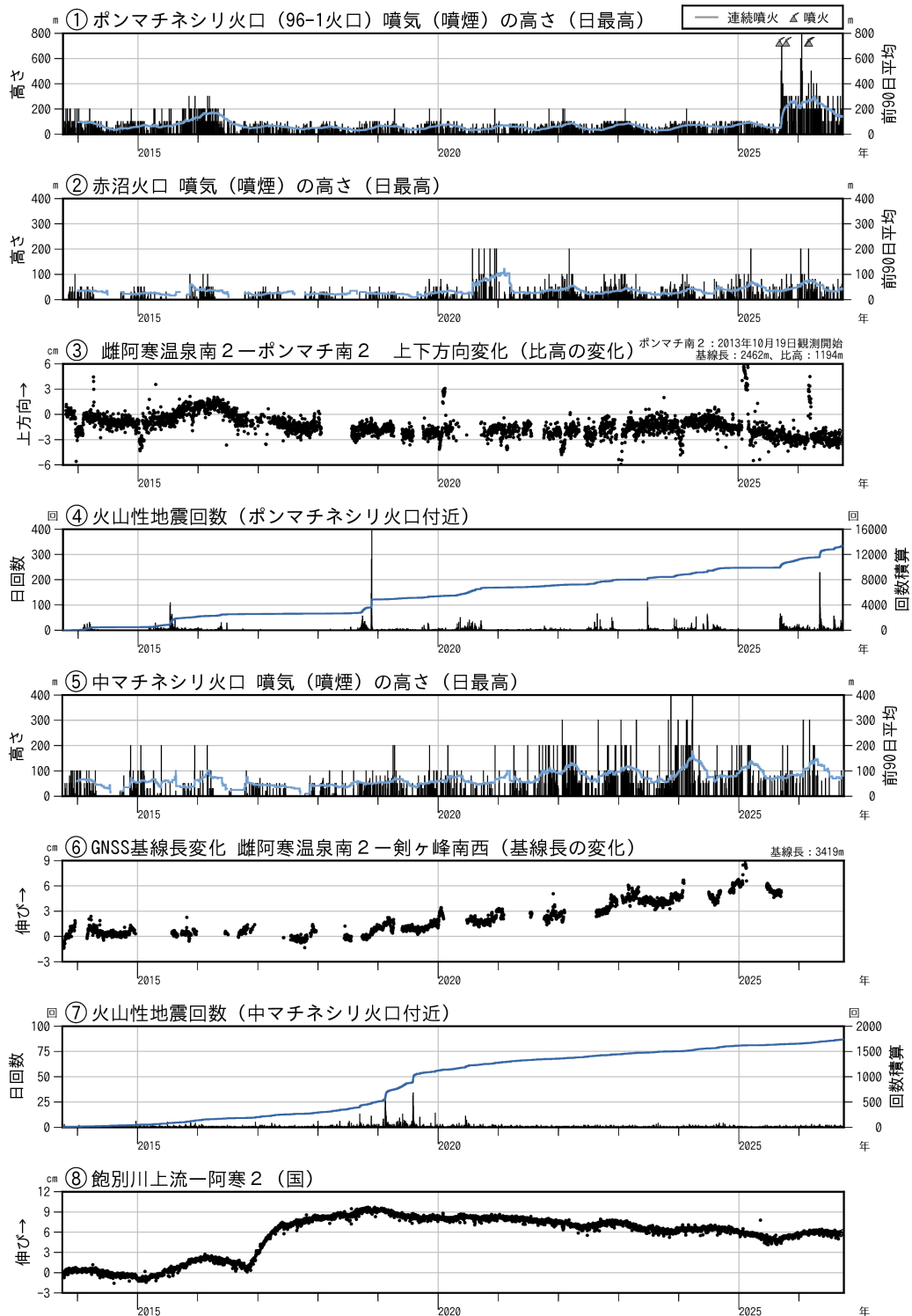


図9 雌阿寒岳 火口別の活動経過図（2013年10月～2026年9月）

- ・各火口の位置は図1を参照してください。
- ・グラフ③、⑥、⑧は、それぞれGNSS連続観測の基線図（図13）基線④、⑦、⑨に対応しています。グラフ⑥の直近の空白部分は欠測を示します。
- ・グラフ④、⑦の回数は、雌阿寒岳付近で発生したと計数した地震のうち、発生領域が明瞭に識別出来たもののみを計数しています。
- ・ボンマチネシリ火口付近では、2025年9月以降、活発な噴煙活動が継続していますが、5月頃以降はやや減少し、衰退が認められます。また、同火口付近の火山性地震は、6月以降、概ね少ない状態で推移していますが、8月以降は時折やや増加が認められています。
- ・中マチネシリ火口付近の活動状況を示唆する観測データに特段の変化は認められていません。

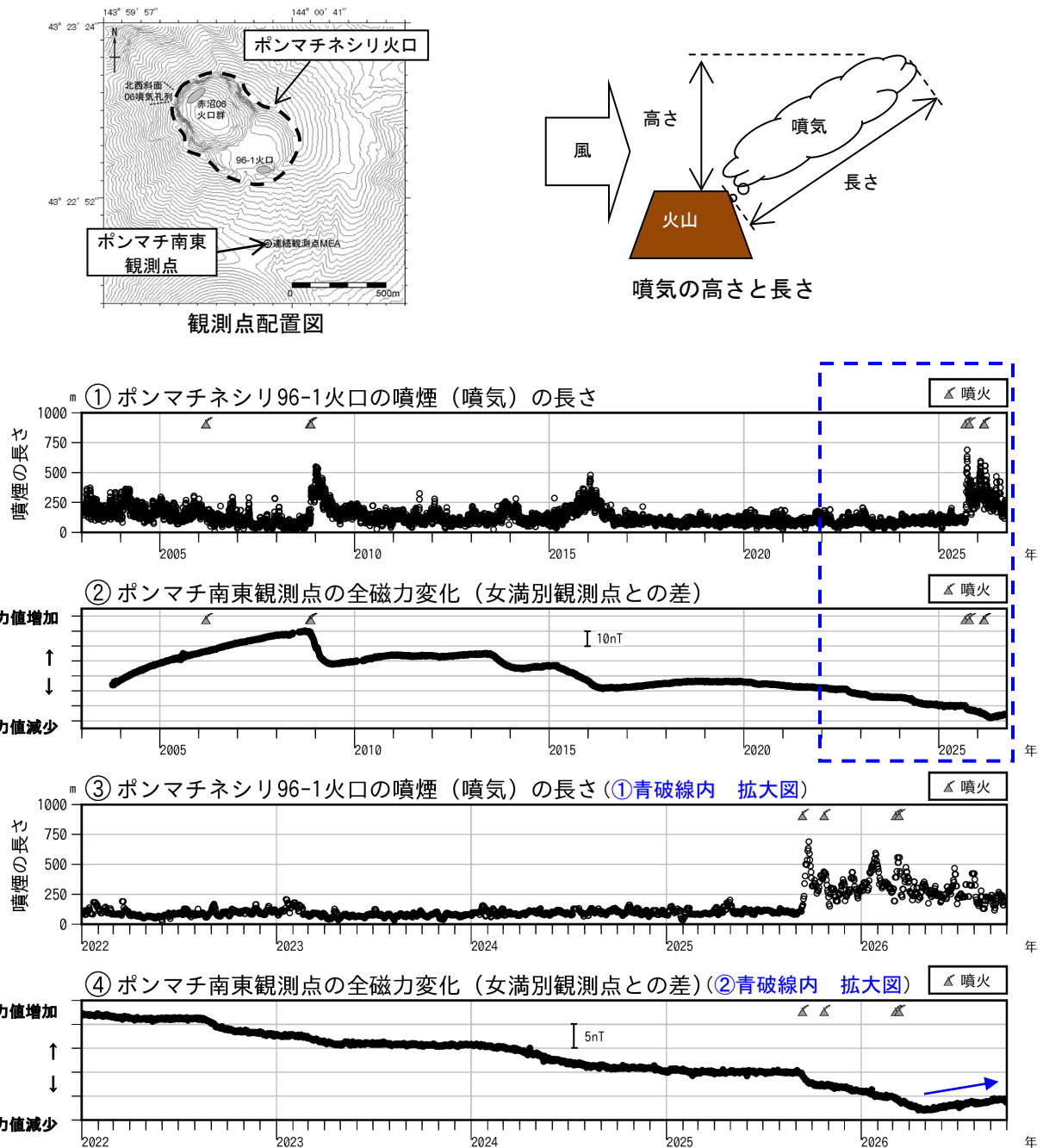


図10 雌阿寒岳 ポンマチネシリ96-1火口の噴気（噴煙）の長さ（噴煙）の長さおよび全磁力値の経過及び全磁力観測点配置図（2003年～2026年9月）

- ・①③のグラフに示す噴煙の長さは気温の影響を受けることから（気温が低いと噴煙は長くなり、高いと短くなる傾向がある）、気温補正後の値をプロットしています。
- ・②④のグラフに示す全磁力値は、地磁気観測所女満別観測施設との全磁力値差をプロットしており（表示開始は2003年10月16日）、空白部分は欠測を示します。
- ・2006年の噴火は赤沼火口からの噴火です。また、2025年9月の噴火は、9月12日から15日の間に発生したと考えられます。
- ・96-1火口の噴煙の長さは、2025年9月12日以降増大してその後も活発な状態が続いていますが、5月頃からやや減少しています。
- ・96-1火口南側のポンマチ南東観測点で、2025年9月12日以降、96-1火口近傍の地下における熱活動の活発化を示すと考えられる全磁力値の減少がみられ、以降も緩やかな減少傾向にありましたが、5月頃からは増加傾向に転じて推移しています（青矢印）。
- ・中長期的には、2020年頃から全磁力の緩やかな減少がみられています。

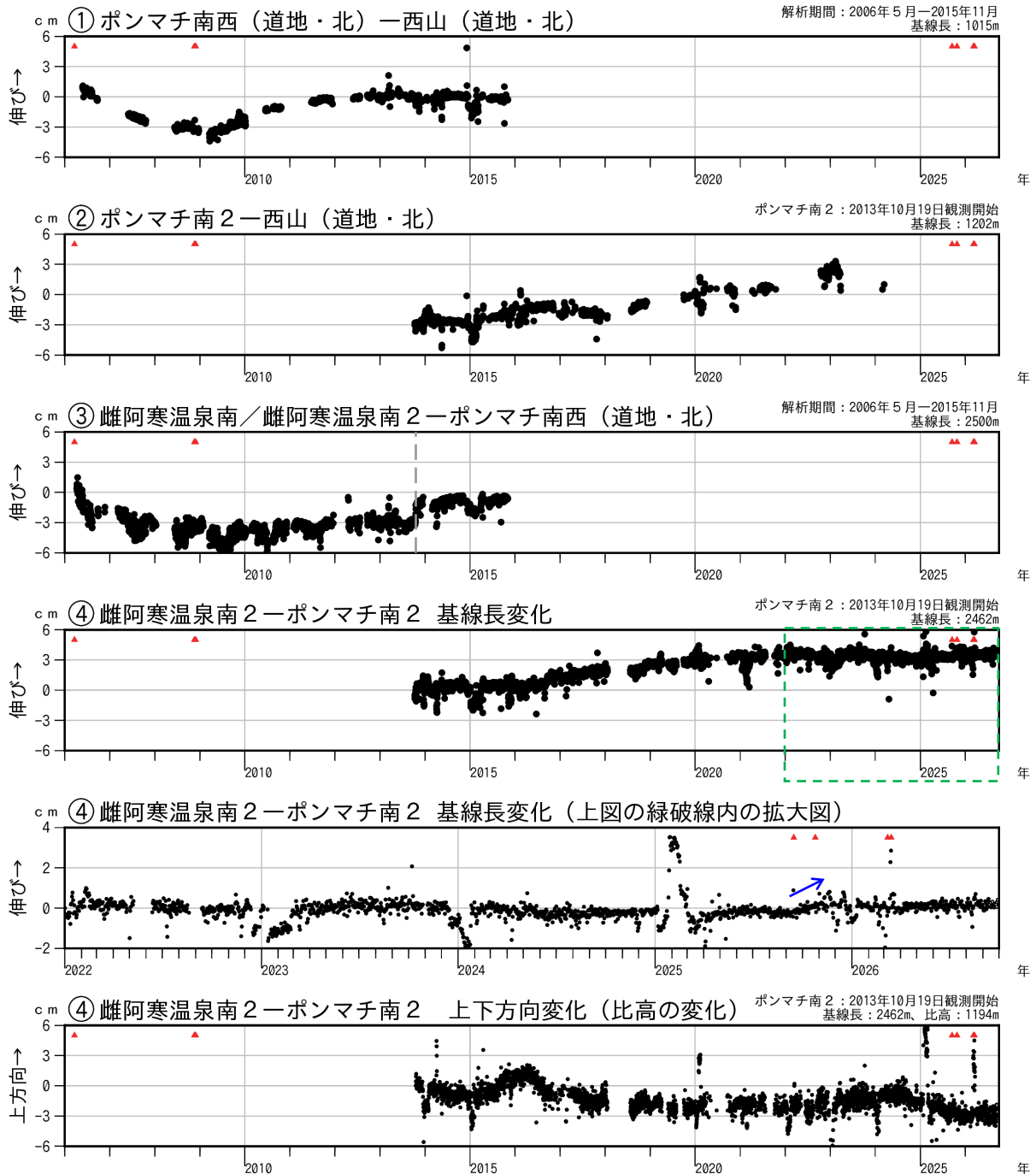


図11-1 雌阿寒岳 GNSS連続観測による基線長及び比高の変化（2006年4月～2026年9月）

- ・ グラフ①～④はGNSS連続観測の基線図（図13）の基線①～④に対応しています。
- ・ ▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。
- ・ ポンマチ南西（道地・北）とボンマチ南2はそれぞれ別の場所に設置された観測点ですが、基線②は①、基線④（基線長）は③と類似した推移を観測していると考えられます。
- ・ 基線③の破線（2013年10月19日）前後で雌阿寒温泉南から近隣の雌阿寒温泉南2に観測点を移設しています。
- ・ グラフ④は基線④の基線長と比高を別個に描画しています。比高は雌阿寒温泉南2からみたボンマチ南2の上下方向の動きを表しています。
- ・ 冬季に凍上や積雪の影響によって考えられる変動がみられる基線があります。
- ・ 基線④（基線長）では、2025年9月中旬から11月頃にかけてごくわずかな伸長（青矢印）が認められましたが、その後、特段の変化は認められません。

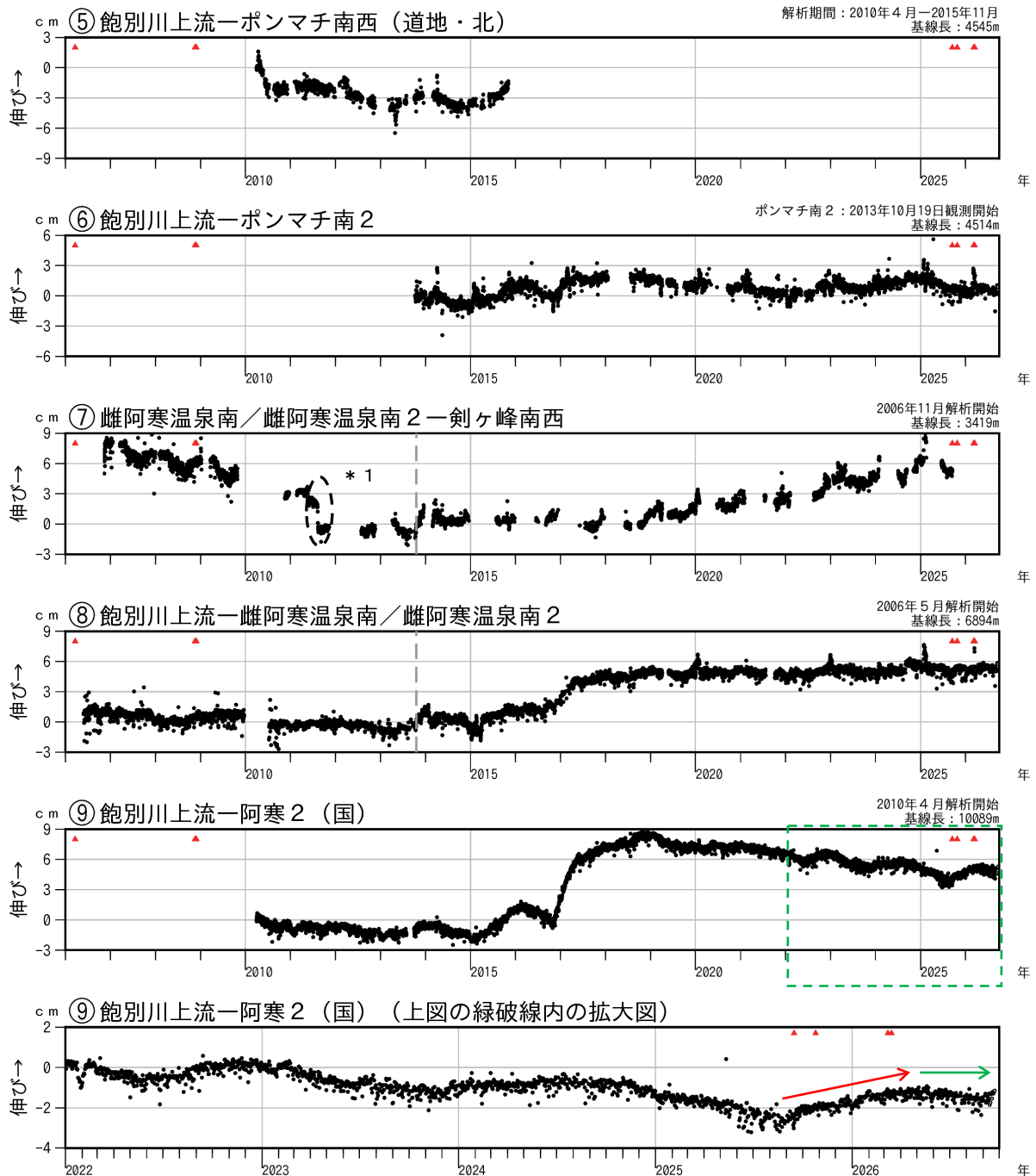


図11-2 雌阿寒岳 GNSS連続観測による基線長の変化（2006年4月～2026年9月）

- ・ グラフ⑤～⑨はGNSS連続観測の基線図（図13）の基線⑤～⑨に対応しています。
- ・ ▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。
- ・ * 1：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。
- ・ ポンマチ南西（道地・北）とポンマチ南2はそれぞれ別の場所に設置された観測点ですが、基線⑥は⑤と類似した推移を観測していると考えられます。
- ・ 基線⑦⑧の破線（2013年10月19日）前後で雌阿寒温泉南から近傍の雌阿寒温泉南2に観測点を移設しています。
- ・ 冬季に凍上や積雪の影響によって考えられる変動がみられる基線があります。
- ・ 東側山麓の観測点による基線⑨では、2025年8月末以降、山体付近の膨張を示すと考えられるわずかな伸長（赤矢印）が観測されていますが、4月末頃から鈍化し、概ね停滞しています（緑矢印）。
- ・ 基線⑦では2019年頃から中マチネシリ火口付近浅部の膨張を示唆するわずかな伸長傾向が認められます。

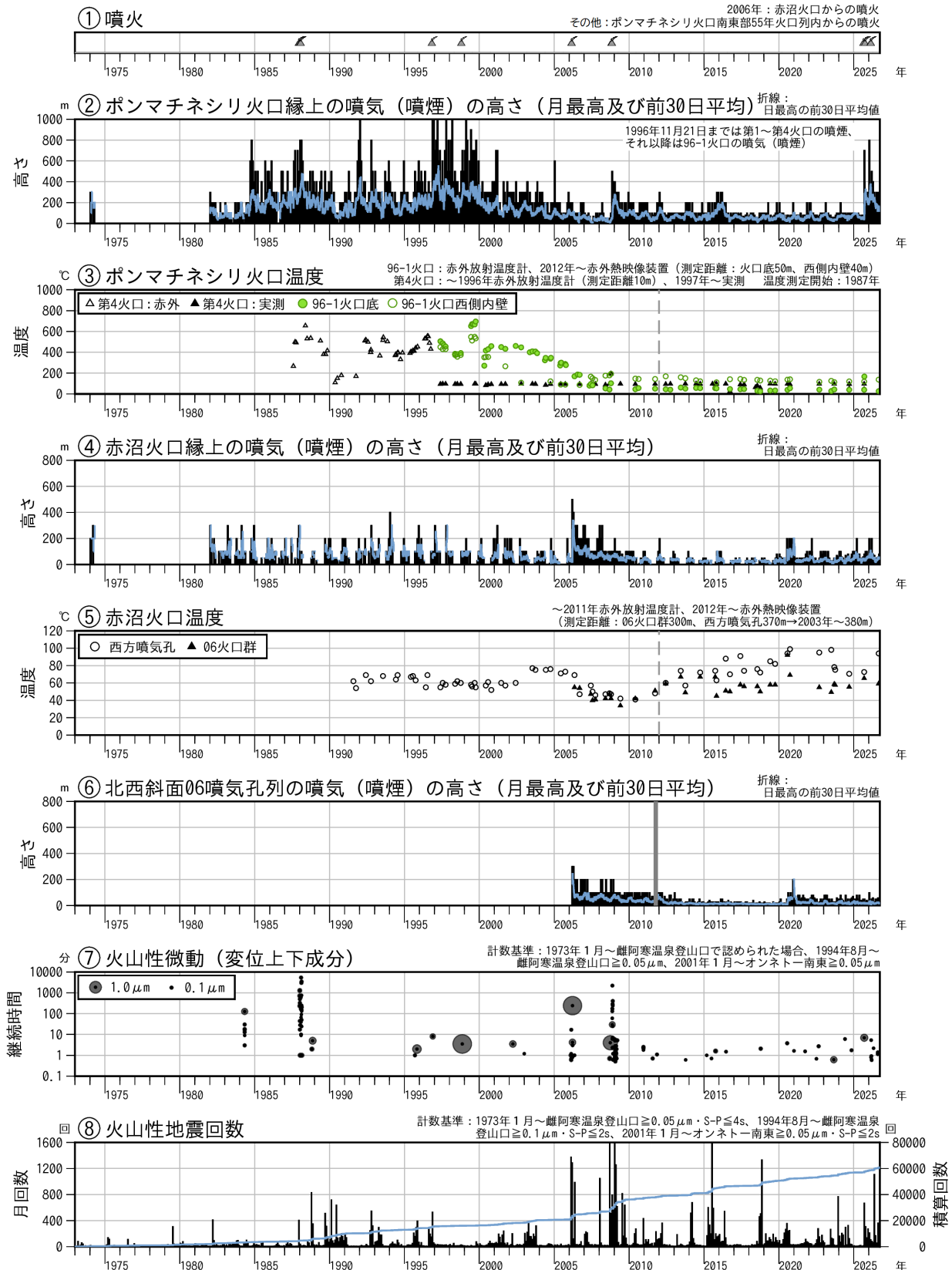


図12 雌阿寒岳 火山活動経過図（1973年1月～2026年9月）

- ・③：各火口温度は北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータを含みます。
- ・③⑤：測定機器の変更により、2012年（破線）前後では測定温度に差が生じている可能性があります。
- ・⑥：灰色部分は機器障害による欠測を示します。
- ・各火口の位置は図1を参照してください。

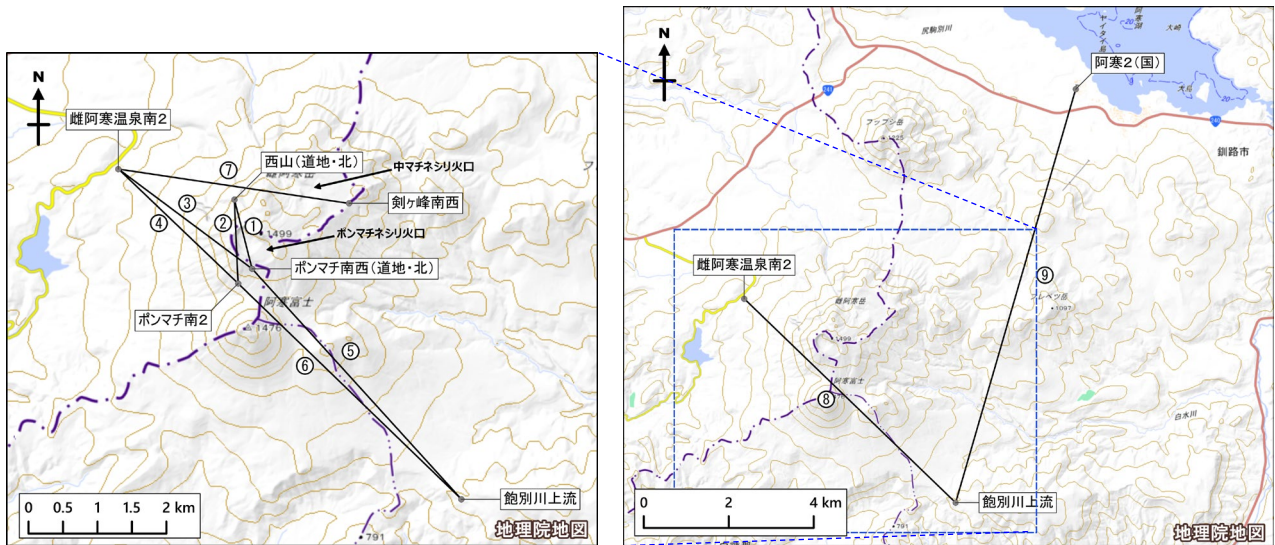
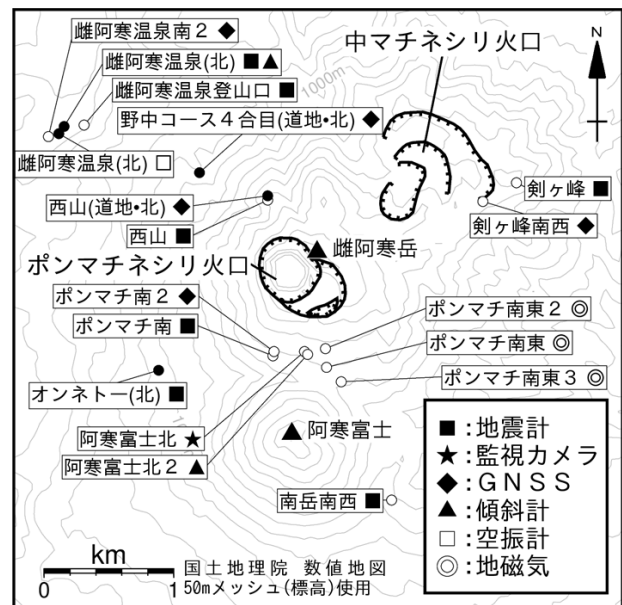
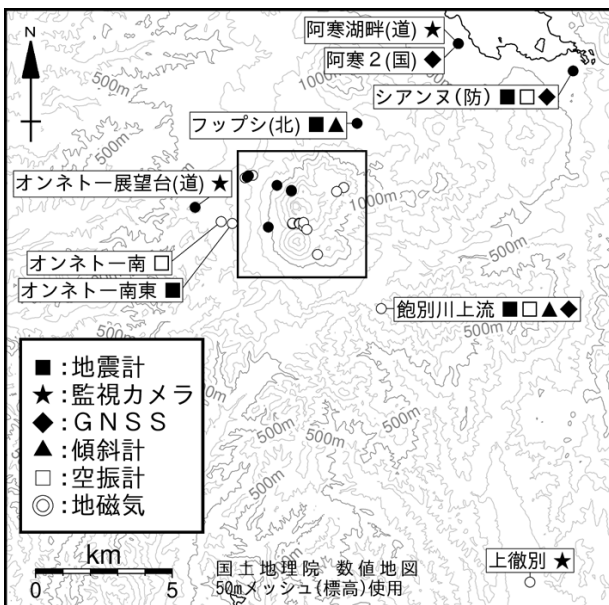


図13 雌阿寒岳 GNSS連続観測の基線図

- ・基線①～⑨は、図11のグラフ①～⑨に対応します。
- ・基線⑨は、図2のグラフ⑥に対応しています。
- ・基線④、⑦、⑨は、それぞれ図9のグラフ③、⑥、⑧に対応しています。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は他機関の観測点位置を示しています。左図中の四角囲みは右図の表示範囲を示します。
 (国): 国土地理院、(北): 北海道大学、(防): 国立研究開発法人防災科学技術研究所、(道): 北海道、
 (道地): 地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所

図14 雌阿寒岳 観測点配置図